

青年期の瘦身願望を規定する要因に関する研究

仮屋園 昭彦*
(1997年10月15日 受理)

Determinants of lean figure desire in adolescents

Akihiko KARIYAZONO*

The present study was performed to examine determinants of lean figure desire in adolescents. Subjects were asked to rate body images, satisfaction of body, and consideration of figure of ones own. And then subjects rated degree of lean figure desire. Multiple-regression analyses were performed on estimates, regarding the estimates of lean figure desire as dependent variable and the estimates of body images, satisfaction of body, and consideration of figure as independent variables. The following results were obtained; ① In female students, body images, satisfaction of body, and consideration of figure had effects on lean figure desire, ② In male students, body images only had effects on lean figure desire. These results were interpreted as suggesting that determinants of lean figure desire in adolescents differed greatly depending on sex.

Key words; lean figure desire, body images, satisfaction of body, consideration of figure

問題と目的

現代社会は、非常に価値観が多様化した時代である。ライフスタイル1つとってみても、結婚観、職業観、などは非常に多様化し、個人によって大きく異なる。しかもどれが正しいとか誤りである、といった絶対的な価値基準もなくなっている。学校の問題にしても、ひと昔前までは、「学校には行かねばならぬ」といった絶対的な価値観があったように思うが、近年、いじめや登校拒否が問題視されるようになって、学校に行けないようであれば必ずしも登校にこだわる必要はない、といった考え方も認められてきている。

こうした価値観の多様化した社会にありながら、依然として大きな価値判断の基準になっているものも存在する。本稿で筆者が取り上げる瘦身願望も、依然として変わらない価値基準の中から生じた現象なのではないだろうか。

*鹿児島大学教育学部心理学科

Department of Psychology, Faculty of Education, Kagoshima University

瘦身願望とは、痩せたいという気持ち、スリム(slim)な身体つきに対する憧れ、スタイルの良さに対する願望の総称である。ただし、こうした瘦身願望を抱くにいたった理由は人によって異なり、さらに、痩せるために具体的な行動を実行しているか否かまでは問わない。したがって、痩せたいという気持ちをもっていれば、それがどのような理由から生じたものであれ、痩せるための行動をとっていてもいなくても、瘦身願望をもっているということになる。

このように瘦身願望は、多様化した価値観をもつ現代社会の中でも、瘦身イコール善、という多くの人が共有している、多様化することのない、現代社会を代表する価値観の1つであると言える。

ただ、瘦身イコール善、という考え方には、健康上の理由、若く見える、など、実生活上の長所がある。また、現代社会では、太っていることが、不健康さ、自己管理能力の欠如、といったマイナスの意味合いをおびるようになってきてもいる(浅野, 1996)。したがって、瘦身イコール善という考え方が依然根強いのはそれなりに理由があることではある。

瘦身には実生活上の長所があるが、もちろん短所も認められる。瘦身に対する願望が痩せるための実際の行動に移り、それが過度になった場合、いわゆる摂食障害が出現することになる。摂食障害は、拒食症(思春期やせ症、神経性食思不振症)、過食症、嘔吐症(自己誘発性嘔吐)の総称である(浅野, 1996)。したがって、瘦身願望は、こうした障害を引き起こすきっかけとなりうる考え方でもある。

瘦身願望は、価値観の多様化する現代社会の中でも多くの人によって共有されている価値観の1つであるため、時代を捉える1つの手がかりになりうる。そのため、瘦身願望はこれまで心理学、社会学などの研究対象になり、多くの研究者が取り上げてきた。

心理学の中で瘦身願望は、主として摂食障害の一部として特に臨床心理学、カウンセリングの領域で扱われている(例えば、Jeammet, 1989; 亀岡ら, 1991)。こうした領域の知見によれば、摂食障害の成因の1つは、拒食、過食の双方で、いずれも身体心像の障害にあることが明らかになっている(野上, 1983)。すなわち、自分の身体の肥り加減を過大に評価してしまうのである。そして、この傾向は、瘦身願望の成因として、摂食障害の患者だけでなく正常な女性一般にみられる現象でもある(野上, 1983; 今田, 1992; 今田, 1996)。

さらに、身体心像障害の発生は特に青年期にみられるという事実が指摘されている(野上, 1983)。青年期は、自己の劣等感が身体的な訴えとして表現されやすく、それが自己臭恐怖、赤面恐怖といった症状に現れるのである。このような青年期に特有にみられる身体心像障害は、摂食障害だけでなく、瘦身願望とも表裏一体をなしている(野上, 1983)。そこで本研究でも、こうした知見に基づき大学生の男女を調査の対象とする。

ところで、以上述べてきたように、瘦身願望を規定する重要な要因の1つである身体心像は、非常に包括的な概念であり、神経学、精神医学、心理学、哲学など幅広い領域で用いられている概念である(西願寺, 1983)。その結果、身体心像という用語は使われていてもその意味は異なる場合が多く、どうしても身体心像という概念そのものに曖昧さが残っていた。こうした状況の中で、Thompson

(1991)の研究は、身体心像を、現在の自分の体型が他者の目からどのように映っていると思うか、自らが冷静に判断すると自分はどのような体型であると思うか、自分の気持ちに正直に従うと自分の体型をどのように思うか、という社会的、認知的、感情的、という3つの側面に分け、女子学生の過食傾向との関連を調べている。この研究は、従来、曖昧な意味で用いられることが多かった身体心像を明確に定義づけしたうえで測定している点で評価できる。この調査の結果、過食傾向が強い学生ほど自己の身体の過大視が強い、ということが明らかになっている。

Thompson (1991)は、社会的、認知的、感情的という面から身体心像を定義づけ、過食傾向との関連を調べた。それに対し身体心像を明確に定義づけたうえで、瘦身願望との関連を調べた研究は未だなされていないのが現状である。こうした点を踏まえ、本研究では、身体心像を評価という視点から捉えた定義づけを行う。すなわち、身体心像には、自分の身体を自分でどのように捉えているかという認知の側面と、その認知に対して自分がどのような評価をしているのか、という評価の側面との2つの側面が含まれていると考えられる。自分は肥っているという認知があったとしても、そのことに対して否定的な評価を下さず、自分で不満ももっていなければ、瘦身への願望は生じないかもしれない。したがって、身体心像を考える場合、どうしても評価という面の検討は不可欠であると言える。このように本研究では、身体心像を認知的側面と評価的側面という2つの側面として定義して捉える。

また、身体心像の評価的側面というのは、自己評価の1つの側面でもある。自分の身体に対する評価は、自己評価を形成する要素になる。従来の研究では、大学生の自己評価の諸側面の中で、「容貌」、「優しさ」、「生き方」の3側面は男女共通して自己評価と強い関係にあることが明らかになっている(山本, 松井, 山成, 1982)。ただし、容貌も含めた身体に対する評価がどの程度自己評価全体に影響するかは、人が容貌面をどの程度重視しているかに規定されると考えられる。そこで本研究では、容貌に対する重視の程度を瘦身願望を規定する要因の1つとして取り上げる。この側面は従来の瘦身願望、摂食障害に関する研究では扱われてこなかった新しい側面である。

以上述べてきたように、本研究では、瘦身願望を規定している要因として、身体心像の認知の側面、評価の側面、および容貌の重視度、という3つの要因をとりあげる。

さらに、本研究では、これら3つの要因の瘦身願望に対する相対的な影響度を重回帰分析を用いて測定する。従来、臨床心理学の領域では、摂食障害や瘦身願望はケーススタディ研究として取り上げられることが多かった。したがって、瘦身願望についても多くの要因が錯綜しているという記述が主であった。その結果、相互の要因の影響を排除した場合に、1つ1つの要因がどの程度瘦身願望に影響を与えているのかが数字として明らかにされることはなかった。こうした面を明らかにすることで、瘦身願望の具体的な構造が明確になり、また、瘦身願望を含めた摂食障害に対するアプローチの指標が得られることになる。さらに、本研究では、男女の双方を対象に、瘦身願望に対する3つの要因の影響度を調べる。このような検討によって、瘦身願望に影響する要因の違い、および要因の相対的影響度の違いを、直接比較ではないが、パターンの違いとして男女間で比較する

ことができる。従来、瘦身願望は主として女性が考察の対象になっていたが、本研究では男子学生をも対象に含むことで、瘦身願望に関する新たな知見が得られる。

なお、本研究では、いわゆる IBM 指数に基づく実際の肥満度は扱わない。従来の研究から、男女ともに実際の体型より肥えていると認知する傾向が強いことが明らかになっている。そして、瘦身願望は実際の体型よりも、身体認知に基づく身体心像に左右されると考えられる。したがって、本研究では、実際の肥満度よりも身体心像の方にのみ焦点をあてる。

これらの点を踏まえた上で、以下に本研究の検討項目を述べる。

① 大学生での瘦身願望の性差を検討する。瘦身願望は従来、男子学生より女子学生の方が強いという結果が得られているが(今田, 1996), 本研究でも、従来の結果を確認する目的で、瘦身願望の性差を調査する。

② 身体心像の認知の側面を体型の認知, 評価の側面を身体満足度とし、さらに各被験者の容貌の重視度を調査し、これら3要因の瘦身願望に対する相対的影響度を重回帰分析によって測定する。

そして、男子と女子では瘦身願望に影響をもたらしている要因は異なり、女子では評価、容貌の側面の影響が強く、男子ではこうした側面の影響はみられない、という仮説を設定する。

③ 瘦身願望が、痩せるための活動を実際にどの程度引き起こしているのかを調査する。先にも指摘したが、瘦身願望はあくまで摂食障害患者という枠内で扱われることが多かった。そのため、瘦身願望と実際の瘦身を目的とした活動生起との関係が明らかになってるとはいえない状況にある。通常の人の場合、瘦身願望はもっていても、それが願望のままにとどまり、実際の行動生起に結びついていない場合も予想されうる。瘦身願望と実際の活動との関係については、今田(1996)によって、瘦身願望と摂食抑制との関連が調べられ、瘦身願望と抑制的摂食行動との間に有意な相関が見いだされている。しかし、彼の研究は、あくまで摂食という活動のみに限られたものであり、ダイエット運動など痩せるための活動を幅広く調査したものではない。そこで本研究では、瘦身願望が痩せるための活動生起に及ぼす影響力を調査する。瘦身願望が女性の摂食障害を引き起こす契機になっていることを踏まえると、女性の場合、瘦身願望は具体的な活動を引き起こすだけの力をもっていることが仮説として考えられる。

④ 瘦身願望に具体的な目的が伴っているのか否かの調査を行う。瘦身願望はこれまで痩せることを美德とする社会的な文脈で扱われることが多かった。そこで本研究では、これまでより個人的なレベルで痩せることの目的の有無を調査した。こうした調査によって、瘦身願望が単なる社会的風潮の中で生じたものなのか、あるいは個人のレベルでの明確な目的に基づいたものなのかが明らかになる。

方 法

被験者 大学生417名(男子193名・女子224名)

手続き 講義室で瘦身願望に関する調査用紙を配布し、集団調査を行った。

調査用紙の内容

① 瘦身願望度の調査

「つね日頃から痩せたい気持ちがどれくらいありますか」という質問を「全くない・ほとんどない・どちらでもない・わりとある・非常にある」の5段階評定で行った。「非常にある」を5点、「全くない」を1点として得点化した。

② 痩せるための活動の有無

瘦身願望がある（「非常にある」もしくは「わりとある」）と答えた人に対し、痩せるために何か具体的な活動を実行しているかどうかを、「はい」、「いいえ」の2件法で答えてもらった。さらに、「はい」と答えた人にはその活動内容を記述してもらった。

③ 痩せることに対する目的の有無

瘦身願望がある（「非常にある」もしくは「わりとある」）と答えた人に対し、痩せるための具体的な目標があるかどうかを、「ある」、「ない」の2件法で答えてもらった。さらに「ある」と答えた人にはその目的を記入してもらった。

④ 自己の体型の認知（身体心像の認知の側面）

自己の体型をどのように認知しているかについて、「太め・やや太め・標準・やや細め・細め」の5段階評定で答えてもらった。「太め」を5点、「細め」を1点として得点化した。

⑤ 身体満足度（身体心像の評価の側面）

中島・太田（1980）の身体意識の調査に用いられた24箇所（顔の艶・耳・胸・横顔・プロポーション・目・身長・足首・ウエスト・腕・脚の形・容姿・ヒップ・肩幅・口・首・歯・鼻・あご先・頭・体格・太股・顔・体重）の身体部位であった。これらの身体部位に対する満足の程度を「非常に満足している・やや満足している・どちらでもない・やや不満である・非常に不満である」の5段階評定で答えてもらった。次に、分析段階でこれら24項目のうち、斎藤（1993）の研究で、男子学生に不満傾向が見られた身長、歯、体格、体重の4項目について、「非常に満足している」を5点、「非常に不満である」を1点として得点化し、これらの平均点をもって男子学生1人分の身体満足度とした。女子についても、斎藤（1993）の研究で、女子学生に不満傾向がみられたふともも、脚の形、プロポーション、ヒップ、ウエスト、体重の6項目について、男子学生と同様の手続きで女子学生一人分の身体満足度を求めた。

⑥ 容貌の重視度

山本・松井・山成（1982）が作成した自己認知の11の側面（社交性・スポーツ能力・知性・優しさ・性的能力・容貌・生き方・経済力・趣味と特技・まじめさ・学校の評判）を参考に9つの側面（社交性・知性・優しさ・性的能力・容貌・生き方・経済力・趣味と特技・まじめさ）を選出し、自分にとって重要だとみなす順に順位をつけてもらった。これらの順位のうち高いものから順に9点、8点……1点と得点化した。

結果と考察

結果について、検討項目に沿いながら考察していく。

(1) 大学生での瘦身願望の性差の検討

Table 1 に男女それぞれの瘦身願望得点の平均点を示した。結果は、女子の方が男子より有意に瘦身願望得点の平均が高いことが明らかになった ($t=12.10$, $df=341$, $p<.001$)。この結果はこれまでの研究結果と同じものであった。浅野 (1996) は、こうした瘦身願望の違いを生み出す要因の1つとして現代社会の中のジェンダー (社会的性) 概念をあげている。ジェンダー論では、従来、社会化過程の中での性役割の獲得が扱われてきた。また、ジェンダー・スキーマ論では、ジェンダー・スキーマは、男性的、女性的というジェンダーに基づいて対象の認知を方向づける働きをもつ、といわれている。さらに、社会的学習理論の立場では、幼児は男らしさ、女らしさに関する知識を学習するとされている (土肥, 1996)。このように、人は、幼い頃から男らしさ、女らしさに関する知識を獲得し、成人に達してからも男らしさ、女らしさという枠組みの中で対象を捉えるといった認知様式の中で生活している。そして現代社会では、男らしさ、女らしさとは、まずそれぞれの性に特有とみなされる身体や外見によって表示されるものである、という考えが確立されている (浅野, 1996)。こうした傾向は特に女性について著しいように思える。つまり、女らしさというものを考える場合、身体特性は男性よりも女性の方がより重要度が高くなっているのである。そしてこうした理由で、瘦身願望が男性よりも女性により顕著に現れてきたと思われる。

Table 1 瘦身願望得点の平均とSD

	平均点	SD	t 値
男子	2.56	1.44	12.10***
女子	4.07	1.03	

(***...=p<.001)

Table 2-1 重回帰分析の結果 (男子)

目的変数	説明変数 (標準偏回帰係数)			重相関係数
瘦身願望	身体満足度	体型の認知	容貌重視度	
(2.56)	(2.69)	(2.85)	(3.00)	0.704***
	-0.072	0.699***	0.053	

() 内の数値は平均値を示している。

(***...=p<.001)

Table 2-2 重回帰分析の結果 (女子)

目的変数	説明変数 (標準偏回帰係数)			重相関係数
瘦身願望	身体満足度	体型の認知	容貌重視度	
(4.07)	(1.97)	(3.58)	(3.09)	0.658***
	-0.436***	0.292***	0.099*	

() 内の数値は平均値を示している。

(*...=p<.05, ***...=p<.001)

Table 3-1 瘦身願望の強さによる行動あり・なしの人数 (男子)

	非常に強い	強い	χ^2 値
行動あり	11	21	1.242 NS
行動なし	8	28	

Table 3-2 瘦身願望の強さによる行動あり・なしの人数 (女子)

	非常に強い	強い	χ^2 値
行動あり	60	29	17.48***
行動なし	33	58	

(***...=p<.001)

(2) 体型の認知、身体満足度、容貌の重視度が瘦身願望に及ぼす相対的影響

体型の認知、身体満足度、容貌の重視度を説明変量、瘦身願望得点を目的変量として重回帰分析を行った。その結果を Table 2-1, Table 2-2に示す。分散分析により重回帰式の有意性を検討した結果、男子 ($F=62.01$, $df=3/189$, $p<.001$), 女子 ($F=56.25$, $df=3/220$, $p<.001$) とともに有意な結果が得られた。さらに、標準偏回帰係数の有意性の検討を行ったところ、男子では、体型の認知の標準偏回帰係数が有意であり ($F=181.9$, $p<.001$), 女子では、3変量ともに標準偏回帰係数が有意であった ($F=47.52$, $p<.001$; $F=21.26$, $p<.001$; $F=3.77$, $p<.05$)。

上記の結果に基づいて重回帰分析の結果の考察を行う。男子で、瘦身願望に影響を与えているのは、体型の認知のみであって、身体満足度、容姿の重視度は影響を与えていないという結果が得られた。一方、女子では、体型の認知、身体満足度、容姿の重視度の3つすべてが瘦身願望の強さに影響を与えていた。これらの結果は、男子と女子では瘦身願望を形成する要因が異なっていることを意味する。これまで瘦身願望が男性より女性の方が強いという指摘はなされていたが、このように数字として明確な形で表されることはなかった。

この結果の中で注目すべきなのは、男子の場合、瘦身願望には体型の認知という認知の側面が影響しており、身体満足度という評価の側面が影響していない、という点であろう。すなわち、男子の場合、単に肥っているという認知のために、痩せたいと思っているのであり、肥っていることに満足していないから痩せたいと思っているのではない、ということである。同時に男子の場合、容貌重視度も瘦身願望に影響を与えていない。これは、自己認知の側面として容貌を重視しているからといって特に瘦身願望が強くなることはない、ということである。

以上のことから、男子の場合、瘦身願望は、容貌や満足とは関係のない理由で瘦身願望が生じていることがわかる。つまり、男子は、健康上よくない、あるいは日常生活上支障をきたす、など実生活上の理由で、痩せたいと思っているのではなかろうか。

一方、女子の場合は、身体満足度の標準偏回帰係数が3つの要因の中で最も高く、しかもマイナス値をとっている。つまり、女子の場合、瘦身願望に影響を与えている3要因の中でも身体満足度が瘦身願望に対して相対的に最も強く影響を与えているのである。

こうした結果から、男子は評価ではなく認知の側面が瘦身願望に影響しているのに対し、女子は認知よりも評価の側面の方が強く影響している、ということが明らかになった。瘦身願望に関するこうした側面は従来の諸研究では指摘されておらず、本研究で新しく明らかにされた側面であろう。

また、女子の場合は、3つの要因とも有意であり、3つの要因がすべて瘦身願望に対して影響を与えていることが明らかにされた。女子の結果は、自分の身体を肥っていると認知し、しかもそのことに満足していない人ほど瘦身願望が強くなり、同時に、容貌を重視している人ほど瘦身願望が強いというようにまとめられる。

この結果は、先に述べたように、女性にとって女らしさがまず身体的な特徴によって表される、ということに起因するようと思われる。

男らしさ、女らしさというのは、人間にとって自らのアイデンティティを確立する際に非常に重要になる。すなわち、自分自身の内的な世界を一貫してもつ、自分と社会との関係の中で自分を位置づける、存在意義が自分で認知できる、といった自らのアイデンティティを確立するうえで、自分の性を受け入れるということはまず最初になされねばならない精神的作業である。そして自らの性を受容するという作業こそジェンダー・アイデンティティを確立する際にまず必要となることからである(土肥, 1996)。

そして女らしさを獲得するというとうことは、女性にとってはジェンダー・アイデンティティを獲得する際に必要とされることからはなる。そしてその女らしさには、まず身体的な女らしさが要求される。こうした状況に、「やせた女は美しい、女らしい」という固定的な価値観が加えられた結果、女らしさを求めることが痩せることを望むという状態につながっているのであろう。

身体満足度が低く、容貌を重視する人ほど痩身願望が強い、という結果にはこうした背景が存在すると思われる。

女性にとって身体的な女らしさを獲得するということは、自らのアイデンティティを確立するために必要な作業なのかも知れない。一方、男子の場合、男としてのジェンダー・アイデンティティは、必ずしも身体とは関係していない。経済力、仕事上のやりがい、など自らのジェンダー・アイデンティティを確立するための要素が女性とは異なっているのではなかろうか。

本研究での重回帰分析の結果は、男子と女子とのこうした社会的、精神的な背景の違いを如実に表していると言える。

(3) 痩身願望が、痩せるための行動を実際にどの程度引き起こしているのか

痩身願望がある(「非常にある」もしくは「わりとある」)と答えた人に対し、痩せるために何か

男子	
1. 身体を動かすことに関するもの……………	18人(56%)
・腹筋運動をする	・水泳をする、など
・ダンベル体操をする	
2. 食事に関するもの……………	16人(44%)
・食べ過ぎない	・食事を抜く、など
・間食をしない	
女子	
1. 食事に関するもの……………	48人(55%)
・食べ過ぎない	・甘いものや油っこいものを食べない
・間食をしない	・高カロリーのを食べない、など
2. 身体を動かすことに関するもの……………	35人(39%)
・腹筋運動をする	・できるだけ歩く
・ダンベル体操をする	・ストレッチをする、など
3. その他……………	6人(6%)
・長くお風呂に入る	・気になる部分のマッサージをする
・強力ひきしめバックを使用する、など	

Figure 1 痩せるために行っている活動内容

具体的な活動を実行しているかどうかを、「はい」、「いいえ」の2件法で答えてもらった結果を Table 3-1, Table 3-2に示す。Tableの中で「非常に強い」は5段階評定で「非常にある」と答えた人、Tableの「強い」は5段階評定で「わりとある」と答えた人である。

男女の瘦身願望の強度別に、痩せるための行動を実際にとっている人といない人との割合の差の検定を行った。その結果、男子では差がなかったが、女子では差が見られた ($\chi^2=17.48, df=1, p<.001$)。この結果は、瘦身願望が非常に強い場合、それは願望だけにとどまらず具体的な行動を引き起こしていることを示している。そしてこの現象は男性ではなく、女性にみられるものである。おそらく先に述べたような理由で女性の場合、特に瘦身願望は願望だけにとどまらない力をもっていることが示された。そして、瘦身願望が摂食障害をひきおこす土台になる、という知見に対しても本研究により、具体的な数字の裏づけが得られたと言える。

また、Figure 1に痩せるために行っている活動内容を示した。これらの内容をみると男女とも今田の指摘にあったように、摂食抑制だけでなく、身体を動かすことを痩せるための活動として行っていることがわかる。

(4) 瘦身願望に具体的な目的が伴っているのか

瘦身願望がある（「非常にある」もしくは「わりとある」）と答えた人に対し、痩せるための具体的な目標があるかどうかを、「ある」、「ない」の2件法で答えてもらった結果を Table 4-1, Table 4-2に示す。Table内の表記の仕方は Table 3と同様である。男女の瘦身願望の強度別に、痩せる目的をもっている人といない人との割合の差の検定を行った。その結果、男子では割合の差に違いはみられなかったが、女子では差がみられた ($\chi^2=14.64, df=1, p<.001$)。

Figure 2に、男女に記述してもらった具体的な目標を記す。この記述内容は、先に述べた、女らしさは、まず第一に身体や外見に表されるべきである、という考え方を裏づけるものとなっている。すなわち、男子は、「外見」に関する目的は全体の33%であったのに対し、女子では、「服」と「外見」を加えると84%にのぼっている。

Table 4-1 瘦身願望の強さによる目的あり・なしの人数 (男子)

	非常に強い	強い	χ^2 値
目的あり	14	34	0.121 NS
目的なし	5	15	

Table 4-2 瘦身願望の強さによる目的あり・なしの人数 (女子)

	非常に強い	強い	χ^2 値
目的あり	83	57	14.64***
目的なし	10	30	

(***...=p<.001)

(5) まとめ

瘦身願望は第一に、これまで主として臨床心理学の中で、摂食障害をもつ患者という枠組みの中で、摂食障害を引き起こす多くの要因の1つとして扱われてきた。また第二に、今田(1996, 1992)の研究に代表されるようにあくまで食行動との関連で扱われてきた。そのため、瘦身願望そのものを規定する要因を明確に数値の形で示すという試みは、従来行われてはいなかった。本研究では、こうした現状に対して、瘦身願望にはどのような要因が、どのような形で影響を与えているのかを明確に示した、という点に意義があろう。

男子	
1. 外見に関するもの……………	15人(33%)
・見た目をよくしたい	・太っているとみにくい、など
・カッコよくなりたい	
2. 健康に関するもの……………	9人(20%)
・成人病予防のため	・体力増進のため、など
3. 部活に関するもの……………	7人(16%)
・痩せている方が体の動きがいい	
・ベストコンディションを保つため、など	
4. 服に関するもの……………	6人(13%)
・スリムな服を着たい	・流行の服を着たい、など
5. その他……………	8人(18%)
・自分を変えてみたいから	・太っていると彼女に馬鹿にされる
・太っていると気持ちまでたるむから、など	
女子	
1. 服に関するもの……………	62人(44%)
・いろんな服を着たい	・ミニスカートををはきたい
・細身の服を着たい	・洋服をカッコよく着こなしたい、など
2. 外見に関するもの……………	57人(40%)
・きれいになりたい	・見た目をよくしたい
・スタイルがよくなりたい	・きゃしゃな体つきになりたい
3. 健康に関するもの……………	5人(4%)
・太っていると病気になりやすい	
・健康を維持したい、など	
4. 部活に関するもの……………	2人(2%)
・太っていると動きがにぶくなる	
・痩せている方が体の動きがいい、など	
5. その他……………	14人(10%)
・みんながやせているから	・なんとなくやせたい、など

Figure2 痩せるための目的

引用文献

- 浅野千恵 1996 女はなぜやせようとするのか 勁草書房
- 土肥伊都子 1996 ジェンダー・アイデンティティ尺度の作成 教育心理学研究 44, 187-194.
- 今田純雄 1992 食べる-日常場面における人間の食行動に関する心理学的考察- 心理学評論 35, 400-416.
- 今田純雄 1996 青年期の食行動 人間行動学講座 第2巻 たべる 食行動の心理学 朝倉書店 Pp.114-131.
- Jeammet 1989 思春期やせ症の治療技法についての結論-精神力動的アプローチから- 白石潔(訳) 児童青年精神医学とその近接領域 30, 265-276.
- 亀岡智美・阿部順子・真下厚子・林野ヨシエ・岡本正子 1991 幼児期に情緒的虐待を受け低身長, 食行動異常を呈した1男子例 児童青年精神医学とその近接領域 32, 49-60.
- 中島宣行・太田鉄男 1980 身体意識についての研究Ⅱ-大学生のボディ・カテクシス- 順天堂大学保健体育紀要 23, 1-9
- 西願寺弘通 1983 身体イメージ 岩波講座 精神の科学4 精神と身体 岩波書店 Pp.177-208.
- 野上芳美 1983 やせと肥満 岩波講座 精神の科学5 食・性・精神 岩波書店 Pp.75-113.
- 斎藤誠一 1993 青年後期におけるボディイメージの特質と関連要因の検討 神戸大学教育学部研究集録 90, 245-251.
- Thompson, J. K. 1991 Body shape preferences: Effects of instructional protocol and level of eating disturbance. *International Journal of Eating Disorders* 10, 193-198.
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究 30, 64-68.

謝 辞

本研究をすすめるにあたり、鹿児島大学教育学部心理学科平成8年度卒業生永石智子氏にデータ収集、分析の協力をいただきました。ここに記して感謝申し上げます。